第2回「インフラ整備と日本語の近現代―日本語はどのように整備されてきたか(1)」

あべ やすし

http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tagengo2019a/

インフラ整備と日本語の近代

日本が近代国家として出発する過程で、郵便、鉄道、道路、電話、水道、電気、ガスなどのインフラが整備されていった。欧米の技術に学び、機械を輸入し、「お雇い外国人」の力をかりてインフラが整備され、運営される。そうして、人の移動、情報のやりとり、日常の生活が便利になった。新聞、ラジオなどの情報インフラも整備されていった。

欧米からは技術だけでなく、概念も輸入した。そこで誕生したのが翻訳語である。民衆にとって、あたらしい概念を普及するために、たくさんの翻訳語がつくられた。柳父章（やなぶ・あきら）『翻訳語成立事情』はなどの翻訳語がどのように社会に受容されていったのかを整理している（やなぶ1982）。近代に考案された翻訳語は漢字を媒介にして、中国、朝鮮、ベトナムでも使用されるようになった。「なにが彼女をそうさせたのか」といった文は、日本語ではあるが、翻訳調（翻訳文体）であるといえる。「彼女」という語も翻訳語である。翻訳文体についても、柳父の『近代日本語の思想〈新装版〉―翻訳文体成立事情』が参考になる（やなぶ2017）。欧米の文化と接触するなかで、翻訳によって日本語の語彙や文体が整備されたといえる。欧米の文化を見聞きした当時の知識人は、日本語のありようについても問題意識をもつようになる。その後も、言語学者や文学者がさまざまな議論を展開し、その議論は「国語国字問題」と称された。Cinii Books（https://ci.nii.ac.jp/books/）を「国語国字問題」で検索すると、「国語国字問題」と題した本が、ふるいものは1920年代のものから最近のものでは1990年代のものがでてくる（現在は、国語や国字という表現があまり使用されない）。

今回は新聞とラジオという近代社会における主要メディア（情報インフラ）に注目し、近代において日本語がどのように整備されてきたかを概観する。それは、日本語（標準語）を通じて「われわれ」意識を共有するプロセスでもあった。

新聞と日本語

新聞は書きことばのメディアである。日本語の場合、論点になるのは縦書き・横書き、字の大きさ、書体、文体、漢字の用法、おくりがな、ふりがな、かなづかい、敬語の用法、外来語の使用などである。漢字かなまじり文・ローマ字文という論点もある。日本語の文字について、大幅に変革されたのは敗戦後においてである。漢字制限、漢字の新字体、かなづかいの改定、敬語の簡略化などがあった。しかし、漢字やかなづかいについては、近代以来たえず議論があった。ひらがなの新聞、かなづかいについての議論、漢字の使用をなくそうとするカナモジ論、ローマ字論があった。現代のかなづかいよりも表音的な棒引きかなづかいが導入された時期もあった。

墨字（すみじ）でそのような文字に関する議論や実践が展開されるなかで、1890年には石川倉次（いしかわ・くらじ）によって点字の日本語版が考案された。フランス人のルイ・ブライユが考案した6点点字を「かな」に対応させたのである。日本語点字は漢字を使用しない、ひらがなとカタカナを区別しない。点字のかなづかいの歴史については、なかの・まきがまとめている（なかの2015）。

近代日本では、だれでも字が読めたわけではない。そこで、近代の新聞には「小（こ）新聞」といって、わかりやすく書くことを意図したものがあった。たとえば1874年創刊の『読売新聞』は「民衆にわかりやすい言葉にかみくだいて翻訳」するような内容だったという（やまだ2002:41）。山田はこの『読売新聞』について、「民衆のためにわかりやすさを工夫した新聞にもかかわらず、この時期の『読売新聞』を繰（く）っていくと、読み書きできない人々を差別的に眼差す言い方に出会うことがある」という（同上:84）。非識字者がいたからこそ、わかりやすく書いた新聞がつくられた。しかし、だれでも新聞を読めるくらいになるべきだという時代の要請があった。『読売新聞』創刊の時代は、「国民皆学を目指した、学制の発布（1872年8月）」がだされた時代であった（同上:88）。

しかし、学校教育（就学）を普及することも文字の読み書きを普及することも、簡単には実現しなかった。それでも学校教育がすこしずつ普及し、読み書きできる人がふえていくなかで、「非識字」が一部の貧困層の問題にされるようになる。敗戦後の日本において非就学のまま成人した人たちが各地で識字教室や夜間中学で学ぶようになった。識字運動という。識字運動では、読み書きに価値がおかれ、「すべての人に文字を」というスローガンがさけばれた。そのなかで、むしろ文字環境こそをバリアフリーにしようという流れがでてきた（かどや／あべ編2010、あべ2015）。現在の新聞は、文字情報のバリアフリーという課題にあらためて直面している。バリアフリーの視点からの新聞研究もある。そのなかには点字新聞に注目したものもある（はやま2014、2015）。

ラジオと日本語

ラジオは話しことばのメディアである。日本語の放送では、「標準語」で話すことが自明視され、『アクセント辞典』などが出版されるようになる。ラジオの特徴は字を表示できないということである。視覚表現としての漢字は活用できない。耳で聞いてわかることが重要になる。また、新聞とちがい、字が読めない人にやさしい。ただ、聞こえない人には利用できない。

映画『英国王のスピーチ』がしめすのは、近代国家において、ラジオというメディアを通じて国の権威者の声をしめすことがひじょうに重要な一大事であったことである。一方、日本では天皇を神格化するために天皇の声をラジオで活用することはなかった。1945年8月15日、敗戦をつたえるラジオ放送で、はじめて天皇の声を大々的に活用した。しかし、権威主義的な言語使用のせいで、耳で聞いてわかる内容ではなかったといえる。文字化された内容を現代の人が読んでも、あまり理解できるような文章ではない。天皇が天皇専用の自称語として朕（ちん）といっていた時代である。

それでも、わかりやすいことばをもとめる議論はあった。たとえば石黒修（いしぐろ・よしみ）が1940年に書いた『日本語の問題―国語問題と国語教育』は「文部省推薦」とある（いしぐろ1940）。このなかで「ラジオと国語問題」について論じた部分をみてみよう。石黒は、戦局に関する新聞やラジオのニュースを見聞きして気づいたことを書いている。石黒は、これまで漢字にたよって造語してきたために「日本語は目の言葉になりすぎている」という（同上:141）。そして、耳で聞いてわかることが重要であるという意味で、つぎのようにのべている（漢字、かなづかいは現代のものにあらためてある）。

> ラジオの言葉を選ぶ一番よい方法は、放送する原稿をローマ字で書いてみることだろうと思う。ローマ字で見て意味がよくとれなくって、支那文字［漢字のこと―引用者注］を思い浮かべなければならない様な言葉はラジオでは落第に決っている。
>
> ラジオは耳から、ローマ字は目からであるが、日本語をよくすることにおいては全く同じ役目をする。
>
> ラジオで聞いても、ローマ字で書いても、よい言葉が本当によい日本語である。
>
> 国語問題は今日の日本にとってまことに大きな問題であり、その解決の必要は今日までも随分やかましく唱えられて来ているが、実際生活で今日一番関係をもっているのは、印刷、特に新聞とラジオである。この両者が十分その解決に留意されるならば、それは期せずして達せられて行くといっても過言ではないと思う（同上:141-142）。

なお、石黒は『日本語の問題』とあわせて『日本語の世界化―国語の発展と国語政策』という本を書いている。当時、「日本語の問題」とは、自分たちにとっての問題でもあり、他者に使用させる言語としての問題でもあった。

ラジオでは、「だれにもわかる」ことばとして「標準語」が重視されてきた（きたで2019）。ラジオのアナウンサーについての研究書である『「声」とメディアの社会学』で北出真紀恵（きたで・まきえ）は、アナウンサーの採用試験について、つぎのように説明している。

> アナウンサーの採用は中央放送局ごとであったが、受験者の資格、採用方法などにかなりの違いがあった。最大の問題は、地元出身者が多いため地方訛りがぬけず、聴取者からの批判が多く寄せられたことであった。放送協会内部の組織の統一やことばの標準化の問題もあり、アナウンサーはすべて東京で採用しようという機運があがり、第一回の採用試験が1934年1月、東京で行われることになった。…中略…
>
> 「放送のことば」は標準語であるべきで、その標準語とは、東京のことばを基本として成り立っており、標準語を操るという特殊な技能を修得しなければならないアナウンサーには東京在住者（出身者）が適していると考えられていた（同上:24）。

北出はアナウンサーのためのテキストを参照しながら、「標準語を普及させ、国民のことばとする。これが当時、アナウンサーたちに課せられた第一義の任務であった」と指摘している（同上:28）。

現代のラジオは、「日本語の標準語」だけにしばられるものではない。例外的に、多言語によるFMラジオ放送もある。たとえば、1995年の阪神淡路大震災では、多言語によるコミュニティラジオ「FMわぃわぃ」ができた。FMわぃわぃは2016年3月31日にFM放送を終了し、現在はインターネットを活用して放送している（https://tcc117.jp/fmyy/）。現在、「多言語 ラジオ」でウェブを検索すると、多言語ラジオ放送が複数確認できる。
2011年の東日本大震災ではラジオで方言番組が発信された例もある（おおうち2014）。ラジオが発信する「声」は、多様になってきている。

まとめ

新聞もラジオも、時代にあわせて変化しつづけてきた。その変化にはどのような社会的背景があったのか。また、ほとんど変化のない保守的な部分はどんなところか。さまざまな角度から検討することができる。新聞やラジオというメディアは、言語研究の素材でもある。テレビやインターネットのウェブ（WWW）、電子書籍、動画など、あたらしいメディアの動向も重要な研究課題であるといえる。
次回は、日本語の機械化と民主化の歴史に注目する。

参考になる博物館

・ニュースパーク（日本新聞博物館）
・新聞博物館（熊本日日新聞社）
・郵政博物館
・NTT技術史料館
・日本ラジオ博物館

参考文献

あべ・やすし 2013 「情報保障と「やさしい日本語」」庵功雄（いおり・いさお）ほか編『「やさしい日本語」は何を目指すか―多文化共生社会を実現するために』ココ出版、279-298
あべ・やすし 2015 『ことばのバリアフリー―情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院
石黒修（いしぐろ・よしみ） 1940 『日本語の問題』修文館
今野真二（いまの・しんじ） 2009 『振り仮名の歴史』集英社新書
大内斎之（おおうち・なりゆき） 2014 「臨時災害放送局における方言利用の意義に関する考察―福島県冨岡町「おだがいさまFM」を事例として」『現代社会文化研究』59（新潟大学大学院現代社会文化研究科）、1-18
かどや・ひでのり／あべ・やすし編 2010 『識字の社会言語学』生活書院
北出真紀恵（きたで・まきえ） 2019 『「声」とメディアの社会学―ラジオにおける女性アナウンサーの「声」をめぐって』晃洋書房
塩田雄大（しおだ・たけひろ） 2014 『現代日本語史における放送用語の形成の研究』三省堂
玉木俊明（たまき・としあき） 2016 『〈情報〉帝国の興亡―ソフトパワーの500年史』講談社現代新書
土屋礼子（つちや・れいこ） 2002 『大衆紙の源流―明治期小新聞の研究』世界思想社
なかの・まき 2015 『日本語点字のかなづかいの歴史的研究―日本語文とは漢字かなまじり文のことなのか』三元社
羽山慎亮（はやま・しんすけ） 2014 「点字新聞の語彙的特徴」『社会言語学』14号、82-101
はやま・しんすけ 2015 「「わかりやすさ」をめざして書かれた新聞記事の文体的特徴」『社会言語学』15号、43-54
安田敏朗（やすだ・としあき） 2000 『近代日本言語史再考―帝国化する「日本語」と「言語問題」』三元社
屋名池誠（やないけ・まこと） 2003 『横書き登場―日本語表記の近代』岩波新書
柳父章（やなぶ・あきら） 1982 『翻訳語成立事情』岩波新書
柳父章 2017 『近代日本語の思想〈新装版〉―翻訳文体成立事情』法政大学出版局
山田俊治（やまだ・しゅんじ） 2002 『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会
吉見俊哉（よしみ・しゅんや） 2012 『「声」の資本主義―電話・ラジオ・蓄音機の社会史』河出文庫

学生のコメント

言語社会について考えたときに、一番に思いついたのは、アイルランドについてです。私は数ヶ月アイルランドに滞在していたことがあり、アイルランド人に話をきいたら、ほとんどの人がアイルランド語を話すことができないと聞きました。アイルランドはアイルランドのアイデンティティを確立させようと、アイルランド語を復興させようとする動きがあるみたいだが、実際のアイルランド人は看板の標識でさえ読むことができず、難しいからアイルランド語を学びたくないと考えていることを知り、必ずしも言語が社会を変えたり、アイデンティティを確立させるとは限らないのではないかと思いました。

【あべのコメント：英語という言語の威信と対比して、自分たちの言語に否定的になるという状況そのものが「言語が社会を変えている」といえます。アイデンティティというのは肯定的なものばかりではなく、否定的で自嘲的なものもあります。残念ながら。それを残念と思う人もいて、政策がとられている／言語運動があるということですね。その状況については『英語という選択―アイルランドの今』という本が参考になりそうです。】

———

…フランス語は地域によってなまりがある。ネイティブのフランス人の先生がカナダのフランス語圏に留学する生徒に対し苦い顔をしていた。“変なフランス語になっちゃうよ”と言っていた。外国人が日本へ留学して、沖縄弁などの方言を収得するようなものだと考えると先生の気持ちはわからなくもない。

【あべのコメント：どのバリエーションを学びたいか、どこで学びたいか、そんなことは個人の自由なんですよね。その教員が勝手にフランスのフランス語が正統だと錯覚しているだけのことですね。わたしは韓国のテグのことばをはなします。相手にあわせてソウルっぽく話していても、なんだかんだでテグのことばがでます。でも、それがいいのです。京都で生活して9年になるので、京都っぽく話すことも多々あります。4年間すごした山口のことばをまぜてみたりもします。わたしの人生があって、わたしのことばがあるのです。卑屈になることは一切ありません。】

———

…全ての言語には、地域や時代によってことばが変化、差異化することがあるだろうか、疑問に思った。

【あべのコメント：ありますね。だからこそ、言語学の研究テーマに言語変化（language change）がある。ちなみに、話者が第一言語とはことなる言語をはなすようになることを言語シフト（language shift）といいます。いろんなキーワードがあるので、ひとつひとつ理解していってください。】

———

私の所属しているのが「日本文化学部」というアヤシイ名前で国語国文学科なのに漢文学まで対象としている。純粋な日本文化など存在しないように、日本語もそうなのだろうと思う。河村市長が話している「名古屋弁」は市民が話すものとは大きく異なるものであるが、これも差異化なのだろうか。他の市だけでなく、名古屋市民の使うものとも離れてしまっている気もする。

【あべのコメント：河村市長のように話している人もいるんだろうとは予想できます。高齢者がマイクをにぎる（発言権をもつ）ことがあまりないから、そういう印象がもたれるのではないかと思います。ネツゾウできるものでもないので。河村さんは名古屋弁ではなく、「名古屋ことば」という呼称を使用していますね。名古屋市交通局は「名古屋ことばによる駅構内放送」をはじめています（https://www.kotsu.city.nagoya.jp/jp/pc/ENJOY/TRP0003139.htm）。このウェブページをみると観光客を意識したものであるのが興味ぶかいです。】

———

…私は愛知出身ですがほぼ岐阜のところに住んでいるので名古屋弁はほとんど話しませんでした。しかし、高校に入って名古屋から来る人が増えてから自然と自分が名古屋弁を話しているし、大学に入ってからは三重の人の影響で関西弁を気がついたら少し入っているときがあります。…後略…

———

この間、ツイッター上の知り合いと電話する機会があったのですが、何かの単語を私が発音したときに「今めっちゃなまったね！？」と笑われてしまいました。（尾張のアクセントを知らないうちに発してしまった、やっちゃった）と感じました。本来、別に自分の地元の言葉を話したとしても何の落ち度もないはずであるのに、指摘された瞬間、確かに言葉づかいにおいて優劣が存在するように思いました。恐らく、方言蔑視の感覚が、現代の私たちにも想像以上に根付いていると思われます。…後略…

———

…テレビのケンミンショーで、「インタビューでスタッフが聞きとれずお蔵入りになってしまったものを地元民に聞きとってもらう」というものがあり、ある女性が話している映像を見た人は、「この人テレビだからちょっと気どって話しているね。ふだんの会話じゃこんな丁寧に言わない」というコメントをしていたのを思い出しました。あれは女性にとってのあゆみより、フォリナートークであったのかな、と思いました。また、私は三河地方から来ていますが、語尾の「だら」がのど元まできてひっこんでしまうのは、現象としては同化であるのかなと思います。…後略…

【あべのコメント：かるくコード・スイッチングするわけですね。言語調査では、話者がなにも意識しないでふだんどおりに話してくれるといいわけですが、やっぱり意識してしまう。フォリナートークという用語で説明しましたが、どちらかといえばコードスイッチングという用語のほうが適切でした。どちらも社会言語学では重要な用語です。】

———

今では意識していませんが、愛知に来たばかりや自分の県以外の人と話すとき、本来は「何しとるんけ？」や「何でせんがんけ？」などと、こちらの方言に寄せたり、こちらの人にも分かるようにアレンジして方言まじりで話していました。これも同化かなと思いました。ただ、千鳥が話す言葉がおきゃーま語の完全体ではないことを知らず、あれが岡山弁だと思っていたので、他の地域の人は誤解すると感じました。方言のある地域でも、お年寄りの話すものと若者が話すものではなまりに違いがありますが、これも社会変動が起きてきて、変わったということなのでしょうか？標準語の広まりによるものでしょうか？ お米の「ゆめぴりか」の「ぴりか」はアイヌ語で「good」のような意味をもつことが由来していますが、「ゆめぴりか」自体は日本語になっていると思いました。

【あべのコメント：地域のバリエーションが世代によって伝承される部分と伝承されない部分があるのは、ことばの美意識のようなもので左右されます。もちろん、その美意識というのは標準語などを基準にしてのことでしょう。そして、世代ごとに集団を形成するという側面もあるので、そこでも差異化が生じます。「この言いまわしは年寄りくさい」などと意識する場合があります。／言語学用語では借用語、日常語では外来語ですね。日本語に入ってきた表現もたくさんあるし、日本語の表現がほかの言語で使用されているものもたくさんあります。意味がずれていったりしながら。借用語が使用されていることとその言語のルーツというのは別の次元のことです。漢字を媒介にして漢語、朝鮮語、日本語、ベトナム語はたくさんの語彙（漢字語）をやりとりしてきましたが、それは、言語そのものの起源とは関係がありません。この4言語はルーツがちがうというのが現状での学説です。日本語とルーツがおなじといえるのは琉球諸語です。文字と言語のルーツも関係がありません。】

———

外国語と異言語の違いは何でしょうか？…後略…

【あべのコメント：「ことなる言語」を呼称するさいに、学問的にも妥当な表現は異言語だということです。国内少数言語という概念がないからこそ、外国語という用語があまり問題視されてこなかった。けれども、社会言語学的には外国語という用語は適切でないということです。たとえば、日本語と日本手話は異言語です。】

———

言語政策がとられると聞いて、今の時代、対象が外国人、異言語が母語の人が主であるなと思う。きっと昔は、今のようにやさしい日本語や多様な言語との同時表記は滅多になかったのではと思う。（特にやさしい日本語）その表記をしようという考えが、国際交流を重視する今の世間だなと感じた。…後略…

【あべのコメント：表記をやさしくしようという主張は、日本の近代からずっとある議論で、まさに軍国主義の時代にも、植民地における日本語教育を念頭において議論されたこともあります。「基礎日本語」と名づけられていました。安田敏朗（やすだ・としあき）の研究が参考になります。】

———

日本語の方言間にも、全く通じないということが起こると思うんですけど、そうであっても同じ「日本語」に分類されていますよね。それならば、『相互理解度』という論点の必要性があまり感じられないのですが、どうなのでしょうか。

【あべのコメント：相互理解度があっても、なくても、かこいこむ力が強ければ「おなじ言語」と認識される。独立志向が強ければ「多少のちがい」しかないように見えても「ちがう言語だ！」と主張されるし、差異化しようとするということです。「論点としての必要性」というよりは、「言及するポイント」というと理解しやすいでしょうか。たとえば「A語はB語と祖語を同じくする言語であり、ある程度の相互理解度はあるが、国境をへだてているため別言語と認識されている」というふうに。】

———

線引きについて考えた時に「おなじ言語」はルーツが同じという言語学的論点があると習いました。私は外国語に詳しくなのですが、英語やドイツ語などは同じ言葉を祖語にしていると聞いた事があります。これらをおなじ言語というと、多くの否定の意見を受けると思います。ただの論点にすぎないというのを実感しました。…後略…

【あべのコメント：ちょっとちがいます。ルーツがちがう言語であれば、おなじ言語のバリエーション（方言）か、独立した言語かが議論にならないということです（こじつけで起源論が論じられることはよくある）。祖語がおなじ場合は、相互理解度があっても、ちがう言語だと主張される場合があるし、逆に、相互理解度がほとんどないのに、おなじ言語の方言差と認識されている場合がある。そして、言語運動によって独立した言語であると主張しはじめる場合もあるということです。ドイツ語も英語も、インド・ヨーロッパ語族に属します。つまり、祖語がおなじ。】

———

独立する→差異化とありましたが、これは必ずですか？ アメリカは、イギリスから独立しましたが、公用語を「米語」ではなく「英語」にしていると思います。時代の変化によるものかもしれませんが、ふと気になりました。…後略…

【あべのコメント：いい質問だと思いました。わたしの知識ではパッと説明できなかったのですが、『スペリングの英語史』の第7章「アメリカ式スペリング」に、差異化の例が説明されていました。英語の規範をイギリスにもとめていた時代があったけれども、という内容です。】

———

幼児に対して用いる言葉（遣い）と、高齢者に対して用いる言葉について。社会問題規模の問題かどうかは分からないが、おじいちゃん、おばあちゃんと呼ばれるような人に対して幼い子どもに話しかけるような言葉を使う傾向があるように感じる。「年をとると、だんだん赤ん坊に戻る」だとか聞いたことがある。しかし目上の人や自分より年上の人には敬語を用いるという根強い意識が残る中、なぜ高齢者（特に心体機能の衰えている方）に対して幼児に用いるような言葉を発するのか疑問に思っている。…中略…（高齢者に限らず、障がいをもつ方にもあてはまる傾向だろう。）

【あべのコメント：ベイビートークという用語があります。赤ちゃんに対して「パパでちゅよー」というような。英語で「baby talk elderly」と検索してみたら「Baby Talk Speech to the Eldery: Complexity and Content of Messeges」という1983年の論文がでてきました。あと、Elderspeakという用語も発見できました。老人にベイビートークはよくないという記事もたくさんでてきました。キーワードがわかれば、いもずる式に文献が収集できます。研究に大事なのは、ふとした疑問から出発して、あれこれ検索、文献調査しまくることです。だいたいのことは、すでに議論されています。すでに議論されていることを把握して、それでもあきらかにされていないこと、議論が不十分なことについて、自分なりに追求し、文章にまとめ、発表する（世に問う）ことが研究です。世界（社会）から受信し、世界（社会）に発信すること。】

———

…一般に韓国で話されている言語は韓国語、北朝鮮で話されている言語は朝鮮語と呼ばれることが多い。韓国と北朝鮮は元々同じ国だったからルーツも同じで、相互理解度も高いけど、話者の国が違うだけで、2つの言語に区別されている。2つを同じ言語として韓国語と言うと北朝鮮の人は違和感を覚えて、朝鮮語と言うと韓国人が違和感を覚えるから、同じ言語なのか、違う言語なのか判断しにくいと思う。

【あべのコメント：そのとおりです。言語学的には同じ言語です。南北のどちらでも、「ちがいはあっても同じ言語」ととらえていると思います。ただ、呼称がむずかしいということです。朝鮮半島のそとでも朝鮮語は使用されていて、中国には朝鮮人（朝鮮族）の自治州や自治県がありますし、旧ソ連圏では高麗語という呼称があります。在日朝鮮人は朝鮮語と呼称したり、韓国語と呼称したりしています。言語は「領域」にとどまるものではないということも社会言語学的に重要なポイントです。そして、人の再移動として、現代の韓国には中国、ウズベキスタン、カザフスタン国籍の人たちが労働者として生活しています。サハリンからの引揚者もいます。】

———

スペインには、カスティーリャ語、カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語がある。また少数言語で地方で認知されているアラゴン語、アストゥリアス語、などもあり、これらはロマンス語に属する。だがしかし、バスク語のみは系統が不明な言語であり、公用語でありながらその他の言語と異なったルーツをもつと考えられる。そのため、バスク語はスペインの公用語としてふさわしいのかという疑問が生じた。

【あべのコメント：そういう発想はしないですね。ルーツが同じだろうと違おうと、言語は言語である。否定されるべきではないという論理でしょう。】

———

私は「外国語」という言葉が少し使いづらいと感じています。日本語を話す私にとって「外国語」というと日本語以外の言語という意味なように思いますが、それは日本で使われている言語はほとんど日本語だけだと考えているからだと思います。「琉球語」などは、知っていても普段は脇に置いて考えてしまいます。…中略…「外国語」にあたる言葉…中略…英語でいうと、「foreign language」が最もあてはまるのでしょうが…後略…

【あべのコメント：英語だと「another language」ともいいます。こちらのほうが適切で正確ですね。】

———

昨年佐野直子先生の社会言語学に関する授業を受け、ヨーロッパ社会における多言語状況について学びました。言語によって国を区分するヨーロッパの国民国家思想は、一つの国家に多様な言語が存在する実態との違いによって大きな戦争を引き起こし、崩壊へむかいましたが、日本においても、単一言語国家であるという実態とは離れた認識がされることがしばしばあり、こうした理解はどのようにして育まれてきたのか、調べてみたいと感じました。

【あべのコメント：日本は敗戦後に「単一民族」の国というスタンスをとるようになりました。】

———

以前学科の英語の授業で読んだ論文（記事）に、スウェーデンで使われる“hen”という代名詞のことを書きます。“hen”とは、“she（彼女）”、“he（彼）”でもない中性的な代名詞らしく、スウェーデンでは幼稚園からこの言語を使うよう努めているそうです（カテゴリーの線引きとの問題とは少しズレるかもしれませんが）。…後略…

【あべのコメント：言語のジェンダーについては後期でとりあげます。henについては英語のウィキペディアの説明がわかりやすいですね。「Hen (Swedish: [hɛnː]) is a gender-neutral personal pronoun in Swedish intended as an alternative to the gender-specific hon ("she") and han (“he”).」（「Hen (pronoun)」 - Wikipedia）】

———

…燃える→燃やすと似ているけれど、今まで「貼るカイロ」と「貼らないカイロ」だったのに最近「貼るカイロ」と「貼れないカイロ」という表記を見る。これにも何か意図があるのでしょうか。…後略…

———

同じ日本国内の中でも方言がひとつの言語として成り立っているという例の一つとして挙げられていた「ケセン語」は、どのようにして成り立ったのか気になった。言語として独立するためにはただ主張しているだけでは認知・容認されないのではないかと思った。その過程や言語として認められるために行われた行動の内容を知りたいと思った。

【あべのコメント：「ケセン語」で本や論文を検索してみてください。山浦玄嗣（やまうら・はるつぐ）さんの著作がたくさんでてきます。たとえば、『社会言語科学』掲載の「ケセン語を拓く」という2004年の文章をみてください。】

———

北海道にいたときに大阪出身の人にたくさん会いました。大阪だけでなく、神戸や和歌山の人にも会うことがあり、関西弁を話す者同士としてコミュニティができていました。また、大阪出身の知り合いが「たまに大阪弁をおもいっきりつかいたくなる」と言っていたのが印象的で方言のなかにもアイデンティティがあるのだと学んだ瞬間でした。…後略…

【あべのコメント：故郷をはなれて生活していると、ふるさとのことばが恋しくなるものです。アウェイにいるとき、となりの県出身の人に会うと、ことばがにているので親近感をおぼえたりします。】

———

練習問題（1）：「日本文学」というものも、じつは、定義することが困難であるといえる。それはなぜか。論点をふまえて説明してください。

学生の回答

「日本文学」を「日本語で書かれた文学」と定義する場合、どこまでを“ひとつの言語としての日本語”として定義するのか、という問題があいまいであるため。

———

「日本文学」においての「日本」が何を指すのかはっきりしないから。日本語で書いてあることか、日本人と呼ばれる人が書いたら日本文学か、決めることはできない。

———

言語というものを線引きする定義は明白に決まっていないから。アイヌ語や琉球のことばでかかれたものや、古く方言で書かれたものも含めていいのか分からないから。

【あべのコメント：言語という観点からいえば、アイヌ語は日本語とは別言語です。ただ、日本文学という語はあいまいなので、アイヌ語文学をどのように位置づけるのかは、明白ではない。「日本の文学」という意味なら、日本文学には日本語以外の文学もふくめられる。琉球のことばを日本語の方言と位置づけるなら、『おもろそうし』は日本文学に位置づけられるし、別言語と位置づけるなら、日本文学には位置づけられない。しかし、現代のウチナーヤマトグチはどうか。ウチナーヤマトグチなら、日本語の方言とみなす人が多数かもしれない。しかし、作者のアイデンティティはちがうかもしれない。】

———

日本文学というと、日本人が書いた文章やエッセイ、小説を想起できるが、外国人が日本語で書くものは、日本文学になるのか。また、日本人が他の言語で執筆したとき、それは日本文学になるのかが明確でないためであると考える。

【あべのコメント：日本語文学という表現があります。主に、植民地において朝鮮人や台湾人が日本語で書いた文学をさします。植民地文学ともいいます。『近現代アイヌ文学史論―アイヌ民族による日本語文学の軌跡 近代編』という本もあります。】

———

「日本文学」と定義するとき、日本語で書かれている、というものを挙げることができる。しかし、漢語で書かれた、日本文学とされるものも多く存在する。それらがなぜ日本文学なのか、日本人が書いたものと定義しても、まず日本人の定義にゆらぎがある。ということで、「日本文学」と定義することは困難である。

———

どこまでの言語を日本語として定義することが困難であるから。

———

日本語という言語の線引き自体、あいまいで政治的な問題で人為的に決めているものだから、日本文学を決めることも難しいといえるから。

———

注意点

・毎回の配布プリントで説明なしに使用されている用語について、各自で意味をしらべておくこと。